

松浦武四郎の足跡

今からおよそ160年前、一人の人物が天塩川のほとりに降り立ちました。
 彼の名は松浦武四郎。その偉大な功績により往時の北海道そして天塩川を知ることができます。

天塩川と松浦武四郎

松浦武四郎は今から約160年前に天塩川を探検し、北海道内陸の詳細な地勢を明らかにした幕末の探検家です。1845年に初めて蝦夷地にわたり、その後、5回目の踏査時に丸木船で天塩川に分け入った。24日間を費やす大調査の末に、「天塩日誌」という探査記録を著しました。日誌には、天塩川の地勢や流域の動植物、アイヌの人々の生活などが克明に記録され、当時を知る上で貴重な資料となっています。

24日間にわたる流域探検

武四郎が天塩川の調査を行ったのは安政4年(1857)のことです。6月6日(旧暦)に出発した武四郎一行は、河口から川筋をたどるかたちで幌延、雄信内、中川と進み音威子府、美深を過ぎて名寄へと至りました。名寄ではアイヌの小さな村を拠点としながら名寄川、サンル川の調査も行い、その後さらに本流を遡上。最後は源流付近まで到達し、天塩岳を望んだといわれています。

武四郎の見た天塩川

◆ 上流



天塩川の源流は、上川地方と網走地方の境界にまたがる天塩岳から始まり、急傾斜を流れ落ちながら険しい山肌を縫って流れます。上流部は、武四郎が天塩川の源流を探し求めた当時のままの川の姿が見られます。岩尾内ダムから土別市へと向かう流れは、武四郎が探査を試みた支流の剣淵川と合流し、名寄盆地へと向かいます。

◆ 中流



天塩川の中流部は、武四郎が「一國ほどの広さがある」と記した名寄盆地をゆるやかに流れていきます。武四郎は、天塩川の支流名寄川上流をたどって途中のサンル川まで探査しています。天塩川の名前の由来ともなり、すぐれた景観を有し、カヌーイストを魅了する露岸地形である「テッシ」(築のような岩)が多く存在する中流部は、山間の平野といくつもの狭窄部を流れ、昔から交通の難所として知られてきました。

◆ 下流



天塩川の下流部は、その流れを海に向かって大きく方向を変えて進みます。武四郎のたどった頃の天塩川は、中下流部に多くの屈曲部がみられました。天塩平野、サロベツ原野など広大な平地を利用した畑作と酪農地帯が広がる下流部は捷水路工事による多くの旧川が残されています。また、汽水域である本川下流やサロベツ原野の沼では、ヤマトシジミ漁が盛んです。



東西蝦夷山川地理取調図より
(名寄市北国博物館所蔵)



天塩川の河口付近からみた利尻島
天塩日誌より(名寄市北国博物館所蔵)



松浦 武四郎◎略年譜

- | | | |
|----------------|---|-----|
| ● 文化15年 (1818) | 三重県一志郡須川村に生まれる。17歳から本格的に全国各地をめぐる旅に出る。 | |
| ● 弘化 2年 (1845) | 東蝦夷地調査 (第1回) | 28歳 |
| ● 弘化 3年 (1846) | 西蝦夷地調査 (第2回) | 29歳 |
| ● 嘉永 2年 (1849) | 千島等調査 (第3回) | 32歳 |
| ● 安政 2年 (1855) | 幕府より蝦夷地御用雇を命じられる | 38歳 |
| ● 安政 3年 (1856) | 蝦夷地、樺太を調査 (第4回) | 39歳 |
| ● 安政 4年 (1857) | 石狩川、天塩川を調査 (第5回) | 40歳 |
| ● 安政 5年 (1858) | 東蝦夷地を調査 (第6回)
江戸に住み始める | 41歳 |
| ● 安政 6年 (1859) | 『東西蝦夷山川地理取調図』等を完成 | 42歳 |
| ● 文久 3年 (1863) | 『天塩日誌』を出版 | 46歳 |
| ● 明治 2年 (1869) | 明治政府より蝦夷地開拓御用掛
後に開拓判官を命じられる
道名・郡名等を建議する | 52歳 |
| ● 明治 3年 (1870) | 官職を辞し江戸で出版や旅行の生活 | 53歳 |
| ● 明治21年 (1888) | 東京神田の自宅で死去 | 71歳 |

■ 武四郎が綴った天塩日誌

武四郎が書き残した『天塩日誌』は、安政4年(1857年)、今から160年前の天塩川の姿を記しています。

蝦夷地最北端の内陸部の様子を詳しく観察し、川の流れや、深さ、川岸の様子、自然や生き物をアイヌ語地名とともに記しています。そこにはアイヌの人々の生活の様子とともに、前人未踏の天塩川の自然を彷彿させます。

現在の川と見比べると、原生の姿そのままの当時の天塩川の姿がきつとよみがえることでしょう。

